

古代文学における蛸の歌と「まつ」^{*}

—『枕草子』の郭公の名所をめぐる会話から—

赤間 恵都子^{**}

はじめに

平安京郊外に郭公^{ほとけみぎ}の声がよく聞こえるという場所があった。中宮女房たちはそこを目指して、一台の牛車で出かけることになる。『枕草子』「五月の御精進のほど」の段の始まりである。この時、牛車に向かった先については、続いて記される本文の地理的分析から、下賀茂神社の奥に位置する松ヶ崎という地名が推定されている⁽¹⁾。目的地を松ヶ崎であると想定すると、出発前の女房たちの会話の中から興味深い問題が浮かび上がってくる。当該部分の本文を掲げよう⁽¹⁾。

つれづれなるを、「郭公の声たづねに行かばや」と言ふを、われもわれもと出で立つ。賀茂の奥に、なにさきとかや、七夕のわたる橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。「そのわたりになむ、郭公鳴く」と人の言へば、「それは蛸なり」と言ふ人もあり。「そこへ」とて、五目のあしたに、宮司に、車の案内言ひて、北の陣より、五月雨はとがめなきものぞ、とて、さしよせて、四人ばかり乗りて行く。

郭公が鳴いている場所として掲げられた「なにさき」は、「にくき名」だということと地名があえて明示されていないが、一人の女房が反応して、「それは（郭公じゃなくて）蛸ですよ」と口を挟んでいる。ここで、問題とすべき点は二つある。一つは、「なにさき」がなぜ「にくき名」なのかということ、もう一つは、女房がなぜ蛸を思い浮かべたかということである。

まず、第一点目について考える。「なにさき」を「まつがさき（松ヶ崎）」とすると、にくき名として具体的に示されなかった「なに」に置き換えられる部分は「まつが」であるが、「が」は連体修飾語を表す格助詞なので、「まつ（松）」の語が相当することになる。それがなぜ「にくき名」なのかを考えると、松には、「待つ」に掛けて用いるという和歌の常套表現があり、清少納言が、「待つ」という行為に対して否定的なイメージを持っていたからではないかと推測される。

いわゆる宮仕え称賛論⁽²⁾で力説しているように、清少納言は結婚して夫を待つだけの妻となる人生を嫌って、女性であっても社会で活躍できる宮仕えの道を選んだ。そのような価値観が、彼女を受け入れた定子後宮の気風とも合致した。中宮定子が、一条天皇の唯一の後として栄華の最中にいた時期はもちろん、中関白家没落後も